

首都圏外郭放水路のさらなる利活用に向けた提言



平成29年10月

首都圏外郭放水路利活用懇談会

はじめに

国土交通省江戸川河川事務所においては、広く一般の方に「首都圏外郭放水路の施設」や「治水に関する事業効果」について情報提供を行うことにより、防災に関する意識啓発を図ると共に、治水事業等に対する理解を深めてもらうことを目的として、見学会を開催している。中でも「地下神殿」とも称される調圧水槽の見学は注目を集めている。

本施設は、海外メディアでも多数取り上げられていることから、約1割が外国人の見学者で占められているが、東京オリンピック・パラリオンピックに向けたインバウンド需要の取り組みや地元春日部市の観光・シティセールスの面でも期待が高まっている。

このような中、平成28年3月に策定された「明日の日本を支える観光ビジョン」において、魅力ある公的施設・インフラの大胆な公開・開放が掲げられ、「首都圏外郭放水路」についても、単なる洪水対策施設に留まらず、魅力ある公的施設として、広く国民、そして世界に観光資源としても開放していくことが求められている。

このようなことから、本提言は、首都圏外郭放水路のさらなる利活用について、学識者、地元首長、マスメディア及びインバウンド等に関する専門家からなる「首都圏外郭放水路利活用懇談会」を設置し議論を行い、民間活力の導入や春日部市、市民団体との連携による地域の魅力創出などの提言をとりまとめたものである。

1. 首都圏外郭放水路の利用の現状

首都圏外郭放水路は、中小河川の水を地下に取り込み、国道 16 号の地下 50 メートルを貫く総延長 6.3 キロメートルのトンネルを通して江戸川に流す放水路で、平成 18 年に完成した。

江戸川河川事務所では、より多くの人に、首都圏外郭放水路の役割と治水事業等に対する理解を深めてもらうことを目的として、積極的に見学を受け入れている。特にコンクリートの巨大な柱が立ち並ぶ地下空間が、「地下神殿」とも称される調圧水槽の見学ツアーは人気が高く、中でも、月に 2 回開催している土曜日のツアーは予約が取りにくい状態が続いており、平成 28 年度は、651 回の見学会に、年間約 1 万 8 千 5 百人が参加した。近年、広報施設である龍Q館では、年間約 3 万 5 千人の見学者を迎え入れており、施設完成以来、通算 40 万人が来場している。

また、国内外のメディアの取材なども多数受けており、調圧水槽の見学ツアーの約 8%は外国の参加者である。

このように、首都圏外郭放水路は、国土交通省の管理するインフラとしては、最も注目されている施設の一つである。

2. 首都圏外郭放水路に対する利活用の要請

首都圏外郭放水路は、多くの人を惹きつける魅力を持った、日本が世界に誇れるインフラ施設であり、観光立国を目指す現状から、インフラツーリズムへの利活用をより一層推進していくことが求められている。

利活用の推進にあたっては、広く国民に治水事業への理解を深めてもらうことは言うまでもなく、インバウンド需要を見据え海外からの観光客もとりこみ、地域観光の拠点の一つとして、地域の活性化に資することも期待されている。

3. 首都圏外郭放水路のさらなる利活用に向けた提言

首都圏外郭放水路の利用の現状、要請を受けて、懇談会としては、さらなる利活用に向けて、以下の 5 点について提言する。

- (1) 利活用の一層の推進に向けて、施設を大胆に民間に開放し、魅力的なコンテンツを導入して見学ツアー等を運営するべきである。
- (2) 来訪者の裾野を広げるため、まずは、「来てみたい」と思わせるための、メディアを活用する戦略が重要である。
- (3) 治水インフラ施設としての役割をさらに実感してもらうためのツアーの充実を図るべきである。
- (4) 地域観光の核として、地域と一体となった周遊性のあるツアーの検討や、市民が活躍できる場として活用できる仕組みを構築するべきである。
- (5) 増加しているインバウンド需要を取り込むため、英語表記の充実を図るとともに、外国人にもわかりやすい動線を確認することが望ましい。

(1) 利活用の一層の推進に向けた、大胆な民間開放

首都圏外郭放水路の調圧水槽をはじめとする各種施設の場の魅力を活かし、さらなる来場者の増加を期待するためには、施設の運営を民間事業者に開放し、そのアイデアやノウハウを活かして、施設や見学をより魅力的な内容にしてもらうことが有効である。

民間開放することにより、料金収入を得て運営することも可能になり、公的負担の増加を減少させることも期待できる。

民間活用にあたっては、外郭放水路だけが孤立した施設とならないよう、協議会等を設置し、地域と一体となった運営すべきである。

(2) 来訪者の裾野を広げるためのメディアを活用する戦略

来訪者拡大のための戦略として、施設の治水上の意義を説明する前に、まずは、見て楽しめる施設を目指すという視点が重要である。まず「面白さ」とか、「来たくなる」ものによって人を集めてから、施設の意義を理解してもらうという考え方の方がより多くの人に受け入れられやすい。そのためには、施設の露出のしかたが重要であり、メディアに取り上げてもらうための戦略が必要となる。

例えば、世界に発信し人を惹きつけることができる競技会やアートイベントの開催等、ロケ地として有名になれば、来訪者からも SNS や You Tube などで発信されやすくなる。

また、治水施設として稼働することのリスクを踏まえるならば、観客を呼ぶイベントよりも、撮影した内容を発信する方が中止によるリスクは小さい。

(3) 治水インフラ施設としての役割を知ってもらうためのツアーの充実

一方で、現地に来てくれた、来場者に、首都圏外郭放水路の本来の目的である治水上の役割を知ってもらうことは利用拡大の根本目的の1つとして重要である。現在、出水により施設が稼働している際には見学できないということが、1つのボトルネックとなっているが、利用拡大のためには、いつ来ても見学できるようになることは、効果が大きい。

そのため、今後、現在の調圧水槽だけでなく立坑なども含めたツアー拡大の他、地下河川の役割を知ってもらうための立坑間のトンネルを利用したツアーや、出水で施設が稼働している時の見学なども検討していくことが望ましい。また、施設稼働状況の映像配信など、施設のダイナミックな特徴を伝える工夫も必要である。なお、現在行われていないそのような見学ツアーは、見学者の安全を確保したうえで実施することは当然必要である。

(4) 地域観光の核として、地域と一体となった周遊性のあるツアーの検討や、市民が活躍できる場として活用できる仕組みの構築

春日部市では、年間を通して、藤まつり、大風あげ祭、マラソン大会、夏祭りや音楽祭など、市民参加型の様々なイベントが年間を通じて開催されている。

地域と一体となって外郭放水路が利活用されるよう、市で行われているイベントと親和性のある季節や日程で外郭放水路でもイベントを開催することや、音楽祭などの、市民のイベントを外郭放水路で実施するなど、様々なものをコラボレーションする仕組みを構築し、地域と一体となって魅力の向上を図るべきである。

また、地域との一体性確保のため、路線バス等、外郭放水路とアクセスするための交通アクセスの向上が図られることが望ましい。

(5) インバウンドも含めた観光客受け入れ

外国人観光客の増加のための第一歩として、案内看板や説明パネル等を完全に英語で表記することやSNS等による英語での情報発信は不可欠である。

また、来日する外国人全体を潜在顧客と考え、例えば、東京から春日部市や外郭放水路へ直接移動する方法など、広域的な視点から、外国人にもわかりやすい動線の設定を行うことが望ましい。

4. 今後の利活用に向けての仕組みづくり

首都圏外郭放水路の更なる利活用に向けて3. に示した提言を具体化するためには、施設の管理者である国土交通省や地元の春日部市を中心として、市民団体等も含めた地

域と一体となった取り組みが必要となる。

このため、国土交通省や春日部市、市民団体等で構成された協議会を設立し、民間開放を前提とした外郭放水路の見学者拡大及び春日部市等周辺地域の活性化に寄与する仕組みを構築するよう提案する。

首都圏外郭放水路利活用懇談会 委員名簿

石川 良三 春日部市長

◎ 篠原 靖 跡見学園女子大学准教授

関山 幹人 (株)NHKエンタープライズ 制作本部 エンターテインメント番組
エグゼクティブ・プロデューサー

二瓶 泰雄 東京理科大学理工学部土木工学科教授

ルース・マリー・ジャーマン (株)ジャーマン・インターナショナル代表取締役

(50音順、敬称略)

◎は座長



左から 石川春日部市長・ジャーマン委員・篠原委員 (座長)・二瓶委員・関山委員